言語学論叢特別号（1993）

古典中国語における１人称代名詞「吾」と「我」の使い分け

杉田　泰史

１．はじめに

古典中国語［注１］において、一人称代名詞「吾」と「我」の使い分けがいかなる文法上の原則に基づいているかについては諸説あるが、１９世紀末から今世紀初頭にかけてのいくつかの研究では、「吾」は主語になることが多く、「我」は目的語になることが多いということが指摘されている［注２］。

スウェーデンの中国語学者カールグレンはkarlgren(1920)(1949)において、古典中国語のこうした傾向を一般化し、「「吾」は主格、属格であり、「我」は与格、対格である。」と主張した［注３］。王力(1936)や周法高(1963)はカールグレンのこうした仮説に対して「例外が多すぎる」ことを理由に不賛成の立場に立った［注４］。

現在のところ、「吾」と「我」の使い分けを完全に、あるいは完全に近い程度まで説明できる文法規則は打ち立てられていない。この問題に関しては、「吾」と「我」を「格」の差によって説明する説のほかに、方言差、文体差、階級差など諸説があるがいずれも成功していない。当然ながら資料上の制約から、純粋に言語の内部のみの問題としてとらえることや、単一の原則によってのみ説明しようとすることに対する批判が予想される［注５］。本稿はこうした批判があることは理解した上で、文法上の原則をさらに一つ提案しようとするものである。

なお、ここでは考察の対象を、①『論語』における、②一人称代名詞「吾」と「我」に関する、③「主語」あるいは「目的語」の問題、という三点にあえて限定する。それ以外の問題に関しては、今後の課題としたい［注６］。

２．カールグレン説が有効である例

『論語』における「吾」と「我」の登場回数の内訳は、以下のようになる。

	「主語」	「目的語」
「吾」	９２	３
「我」	１８	２８

以下に「吾」と「我」の用法がカールグレンの仮説に符合する例を挙げる。

「吾」が主語になる例は、９２例ある。以下に３例を挙げる：

（１）吾嘗終日不食，終夜不寝，以思。　15.31.
　－私は以前、一日中食事をせず、一晩中眠らずに、考えごとをしてみた。
（２）吾十有五而志於学。　2.4.
　－私は15歳のとき学問をしようと思い立った。
（３）吾非斯人之徒而誰与？　18.6.
　－私が人間以外の何者と運命をともにするというのか。

「我」が目的語になる例は、２８例ある。以下に３例を挙げる：

（４）由也好勇過我　5.7.
　－由（＝子路）は勇ましいことが好きで私をしのぐほどだ。
（５）大宰知我乎？　9.6.
　－太宰は私（という人間）を知っているのか？
（６）人将拒我　19.3.
　－人々は私を拒むだろう。

「吾」が主語になる９２例と、「我」が目的語になる２８例とは、いずれもカールグレンの「『吾』は主格、『我』は対格である」という仮説に符合する。したがって問題の鍵は、「吾」が目的語になる３例と「我」が主語になる１８例であり、これらの文法的位置づけをより明確にすることが主要な目標といえよう。以下にこうした「例外」について考察を加えたい。

3．カールグレン説の「例外」とその再分析

3．1．「吾」が目的語になる例

以下に「吾」が目的語になる３例を挙げる。

（７）如有政，雖不吾以，吾其以聞之　13.14.

ーもし公的な政務があったなら、私を（現任者として）用いていなくても、私はきっと相談を受けるはずだ。

（８）以吾一日長乎爾，毋吾以也　11.24.

ー私が諸君よりちょっと年長だということによって、私を特別扱いしないことだ。

（９）居則曰，“不吾知也”　11.24.

ー（君達は）一緒にいるといつも「（先生は）私をわかってくれない」と言う。

例(7)(8)(9)には明らかに共通の特徴がある。すなわち「否定文において目的語代名詞が動詞に先行する現象」である［注７］。古典中国語では、否定の副詞（すなわち「不」「未」「弗」「毋（無）」など）や否定を表す不定代名詞「莫」を含む否定文（禁止文を含む）においては、目的語代名詞は［＿Ｖ］である。当然、一人称代名詞も例外ではない。ここに挙げた３例もこの規則を反映している。

「吾」と同様に、代名詞「我」もこうした否定構文を利用して［＿Ｖ］に現れる。『論語』にも以下の２例がある。

（10）莫我知也夫！　14.35.

ー私をわかってくれる者はいないねえ。

（11）日月逝矣，歳不我与　17.1.

ー月日は過ぎ去ってしまい、年月は私と一緒に居てくれない。

こうした代名詞目的語の動詞への先行、という現象は二つの条件に分けて考えることができる。１つは「目的語」について起こるということで、もう１つはそれが「動詞に先行する」ということである。

「吾」と「我」の分布は、この二つの条件を満たすことによって、まずこの構文において重なりあうものである。しかし「吾」と「我」とはこの構文以外での分布において大いに異なる。この共通点と相違点によって、「吾」を要求する基準と「我」を要求する基準とをいったんは説明できる。

［＿Ｖ］の目的語「我」と、より一般的な［Ｖ＿］の目的語「我」とは、いずれも「目的語」という点で共通している。一人称代名詞が目的語になるときは、［＿Ｖ］なら随意に、［Ｖ＿］なら義務的に「我」を選択する。したがって、「我」を選擇する基準は「目的語」という意味上のもので、文法機能の面から要求されるものであるといえる。［注８］

［＿Ｖ］の目的語「吾」と［＿Ｖ］の主語「吾」とは、いずれも「動詞の前に置かれる」という点で共通している。「吾」は、必ず［＿Ｖ］の位置で用いられる。言い換えれば、一人称代名詞が［＿Ｖ］に来る時は、主語であるか目的語であるかを問わず、いずれも「吾」を用いることができる。したがって、「吾」を選擇する基準は［＿Ｖ］というその位置に基づくもので、統語形式の面から要求されるものであるといえる。

３．２．「我」が主語になる例

「我」が主語になる例は、全部で１８例ある。ここではそれらを述語の種類ごとに分類する。

(12) 賜也，女愛其羊，我愛其礼　3.17.

ー賜（子貢）よ、お前はその（犠牲の）羊を惜しんでいるが、私にはその儀式（がなくなること）が惜しまれる。

(13) 我不欲人之加諸我，…　5.12.

ー人が私にそれをすることを私が望まない場合…

(14) 我欲仁，斯仁至矣　7.30.

ー私が仁をほしくなると、すぐ仁はやってくる。

(12) ～ (14) の例は、感情の動きを表す動詞である。

(15) 我未見好仁者、悪不仁者　4.6.

－私はまだ仁を好む者も、不仁を憎む者も、見たことがない。

(16) 我未見力不足者　4.6.

－私はまだ力の足りないものなど見たことがない。

(17) 蓋有之乎，我未之見也　4.6.

－たとえいたとしても、私はそんな人を見たことがない。

(15) ～ (17) の例は、「見」（見る、出会う）という動作である。

(18) 我之大賢与，於人何所不容？　19.3.

－私が賢ければ、人々に対して（彼らを）包容できないことがあろうか。

(19) 我之不賢与，人将拒我，如之何其拒人也？　19.3.

－私が賢くないならば、人々が私をこばむだろう、（こっちから）人々をこばむことがあろうか。

(20) 我則異於是　18.8.

－私は彼らとは違っている。

(21) 君子道者三，我無能焉　14.28.

－君子のやり方に三つのものがあるが、私はできない。

(22) 賜也賢乎哉？夫我則不暇　14.29.

－（他人をとやかく批評する）子貢はそれほど有能なのか？私は（彼ほど）暇ではない。

18) ～ (22) は性質・状態（(20) はその比較の文型）を表す形容詞的性格の述語である。

(23) 我非生而知之者，好古敏以求之者也　7.20

－私は生まれつき何かを知っている人間なのではなく、昔の事を愛好してこまめに探求している人間なのだ。

(24) 我待賈者也　9.13.

－私は（自分を買ってくれる）商人を待つ身だ。

(23)（24）は名詞と名詞との同一性を表す助詞「也」（文末）と、その否定を表す副詞「非」（動詞と同じ位置）の例である。

(25) 用之則行，舍之則藏，惟我与爾有是夫！　7.11.

－採用されれば活躍し、解任されればじっとしている…私と君だけはそういう分別があるね。

(26) 蓋有不知而作之者，我無是也　7.28.

－事実を知らずにねつ造する者もいるだろうが、私にはそういう事はない。

(27) 人皆有兄弟，我独亡　12.5.

－人々にはみな兄弟がいるのに、私にだけはいない。

(25)～(27) は事物の存在または所有を表す「有」と、その否定形「無／亡」を述語とする。

(28) 孟孫問孝於我，我対曰，“無違。”　2.5.

－孟孫が私に孝行について質問したから、私は答えて「間違えないように」と言ってやったよ。

(29) 有鄙夫問於我，空空如也，我叩其両端而竭焉　9.8.

－かりに無学な男が私に質問にきたとする。まるっきりわからない。（すると）私は問題のはじからはじまでつついてそこから答えを出し尽くすのだ。

(28)（29）は「対」（返答する）「叩」（たたく）「竭」（出し尽くす）という動作動詞を述語とする。

以上見てきた［＿Ｖ］の主語「我」の処理は、古典中国語の代名詞の問題において最も重要な課題であった。次項３．３．ではこれを「吾」とも対比しながら再検討したい。

３．３．主語における代名詞の使い分け

『論語』の代名詞の用法に関する先行研究はいずれも統語的形式面から主語そして述語の斉一性を自明のこととしている。個々の述語の意味ごとに主語の役割をさらに分類するという観点は、過去の論文では未見である。ここでは前項で準備した「我」を主語に持つ述語の分類をもとに、１８個の例に共通する意味上の特徴を探ることを試みる。

まず（12）～（27）の１６例についてもう一度観察すると、以下のような共通の特徴が見られる。

（12）～（14）の「愛」（～が惜しい）「欲」（～が欲しい）のような動作は、原則として行為者本人にとっても制御不能である。

（15）～（17）ではいずれも感覚にとらえたという経験を語っており、行為にあたっての動作主の「見よう」とした意志は感じられない。

（18）～（22）は性質・状態であり、本人の意志を直接反映していない。

（23）（24）も主語の性質を説明する述語で、意志的動作ではない。

（25）～（27）の存在・所有もまた事物の状態であり、意志を反映した動作ではない。

このように、主語の「我」の多くは意志性の低い述語に限られ、全体に消極的な態度の主語像が浮かぶ。このような主語のあり方は、他動詞の目的語のそれに近いものといえよう。

さて、１人称代名詞が［＿Ｖ］に置かれて主語となるとき、「吾」の形を取る場合と、「我」の形を取る場合がある訳だが、「吾」は「我」より数の上で多い（９２：１８）。そればかりでなく、その述語の種類にも、「吾」には「我」についてみたような述語の意味における偏向はない。

この「主語となる形に二種類あり、そのうち一方は目的語となる形と共通しており、主語としての振る舞いにも偏向が見られる」という状況について考えるとき必要なことは、「主格／対格」というパラダイムの基になったヨーロッパの印欧語以外にも目を向けることである［注９］。そこでまず思いつくのが、能格と絶対格とが対立するいわゆる能格型ではないかということである。能格型の言語では、他動詞文の主語が一つの格（能格）、自動詞文の主語と他動詞文の目的語がもう一つの格（絶対格）で表される。しかし「吾」と「我」の分布は述語の自動詞／他動詞の区別とは無関係であるから、このタイプにはあてはまらない。

次に考えられるのが、いわゆる active type（「動作格型」「動格型」などの訳語が見受けられる。ここではいったん動格型と呼ぶことにする）の振る舞いをしている可能性である。このタイプの言語では、意志性あるいは制御可能性、という概念が重要な役割を担う。

意志性とは、主語の意志が述語の実現に反映するか否かという観点で、制御可能性とは述語が動作動詞であるとき、主語がこれを制御できるか否かという観点である。動格型の言語では、意志的な動作主である主語が一つの格すなわち動格 active caseによって、非意志的な主語及び他動詞文の目的語がもう一つの格すなわち非動格 inactive caseによって表される。「我」の振る舞いは意志性の弱い述語をよく選ぶという点で、たしかに非動格に極めて近い［注10］。

しかしここで残りの２つ、すなわち（28）（29）の例を見ると、「対」（返答する）「叩」（たたく）「竭」（出し尽くす）はいずれも動作主自身の意志によって行われ、制御される動作である。

では「我」は非動格と全く無縁の存在で、議論は一からやり直さなければならないのだろうか。私はそうは考えない。我々に必要なのは１％でも多く例外を減らすことで、批判は例外のより少ない新たな仮説の提案を持って行うべきであろう。少なくとも今の時点でカールグレンの仮説よりも「我」の例外は１６個減ったのである。

生産的な解決として、（28）（29）におけるこれらの動詞のここでの用法を、意志性の比較的低い意志動詞として、非意志動詞の延長上に位置づけることが可能である。すなわち、述語が同じ「意志的動作の動詞」であるとき、

「吾」を主語とする文－自分自身の積極的動機に基づいてする行為。
「我」を主語とする文－他者の行為への反応としてする行為。

という、「動作に対する動作主の積極性」の差が見られる。これは「我」については例外なく当てはまる。ここでいう「積極性」は「意志性」と異なる。積極性は動作主がその動作を行うに至った動機・原因を問題とし、動作主が動作を制御できるかどうかは問題としないからである。

そこで、「吾」を「積極形」、「我」を「消極形」と仮に呼ぶことにする。例えば、意志的な、すなわち動作主にとって制御可能な動作であっても、「（ひとに尋ねられて）

答える」といった、他者に動機・原因がある動作は、（28）のように、消極形「我」をとる。これに対し、一見すると他者の行為への反応に見えても、「喜んで～する」「きっと～するであろう」といった、要求される前から動作主自身にも予め動機・原因がある動作は、

（30）如有復我者，則吾必在汶上矣　6.9.

－もし私を再度推薦する人がいたら、私はきっと汶水（＝川の名）のほとりに（亡命しに）行っているだろう。

（31）富而可求也，雖執鞭之士，吾亦為之　7.12.

－財産というものが追求してよいものなら、執鞭（のような賤しい役職）にも私は就くだろう。

（32）如有用我者，吾其為東周乎。　17.4.

－もし私を採用するものがいたら、私は東方の周を実現しよう。

のそれぞれの下線部のように、積極形「吾」をとる。

「吾」が積極的主語であるとする根拠はもうひとつある。すなわち、動詞句を目的語にとり、助動詞的に用いられる動詞に「得」（５例）「能」（４例）「欲」（２例）などがあり、これらの動詞が助動詞的であるときには必ず「吾」をとり、「我」はとらないと言う事実である［注11］。それぞれ１例ずつ挙げると、

（33）君子之至於斯也，吾未嘗不得見也　3.24.

－名士の方々がここを通りかかって、私が会うことができなかった事はない。

（34）夏礼，吾能言之　3.9.

－夏の礼法についてなら、私は論ずることができる。

（35）吾不欲観之矣　3.10.

－私はそれを見たくない。

こうした制約はこれらの動詞が助動詞的でないときには働かない。むしろ「欲」などは単純動詞（すなわち名詞句を目的語とする用法）としては（13）（14）のように「我」を要求する。そのため、両者が共存する、

(36) 我$_1$ 不欲$_1$ 人$_j$ 之加諸我，吾$_i$ 亦欲$_2$ $_{(i)}$無加諸人　5.12.

－人が私に対してすることで私が望まないようなことは、私も人に対してしたくないものだ。

のような例では、「之」によって名詞化された節を目的語とする動詞「欲$_1$」は「我」を主語とするのに対して、「欲$_2$」は削除された同一の主語をもつ動詞句「無加諸人」を目的語とする「助動詞」であるため、「吾」が現れる。

「助動詞」に限って主語がかならず「吾」になるという現象の由来については、次のように考える。話し手が、動作主にとってその動作が「できるかどうか」「したいかどうか」を判断すると言う行為（すなわち発話行為とほぼ同時）は、その前の段階で話し手自身の検討を経たものである。この「検討」の段階において「動機・原因」は仮に動作主にあるものと想定されているのである。「吾」が積極的主語であると考えれば、このような説明が可能となる。

4．結語・二つの文法規則の交錯現象

さて、『論語』の「吾」と「我」の分布から少なくとも言える事は、第一に［V＿］に「吾」が置かれて目的語となることはないということ、第二に［＿V］に積極的主語の「我」が置かれることはないということ、この２つの事実である。このようにしてみるとき、「吾」と「我」の差は、

①代名詞の動詞に対する位置の差。
②動作に対する動作主の積極性の差。

の２つに還元できると思われる。即ちここでは、

規則Ａ：１人称代名詞の「動詞に対する位置」による使い分け
［＿V］：「吾」（先行形）

［Ｖ＿］：「我」（後続形）

規則Ｂ：１人称代名詞の「動作への関与の積極性」による使い分け

動作主・主語のみ：「吾」（積極形）

動作主・主語および動作の対象・目的語：「我」（消極形）

という、レベル（意味vs統語）も動機（形式vs機能）も異なる二つの規則が交錯している。これまで見てきた事実は、「吾」が規則Ａに、「我」が規則Ｂにそれぞれ忠実であり、その反対の組み合わせがそれぞれ不徹底である事を示している。したがってそれぞれの代名詞がもっとも大事にする規則をふまえて、「吾」を「先行形」、「我」を「消極形」と呼ぶのが妥当と思われる。その関係を図示すると以下のようになる［注12］。この表では、「吾」が上半分、「我」が右半分にしかそれぞれ現れないことがわかる。

	積極主語	消極主語	目的語
［＿Ｖ］	吾	吾／我	吾／我 （［不＿Ｖ］の位置）
［Ｖ＿］	な　し	我 （有／無（毋）の後）	我

さて、異なる規則が共存していれば、当然、「吾」「我」の両方が許される場合がある。このような場合、前述の「助動詞の主語は必ず「吾」をとる」といった制約以外には、両者の間にどちらかを優先させるような規準は見つかっていない。例文(10)では規則Ｂが優先しているが、これに対して、

(37) 吾未見剛者。5.11.

－私は（本当に）手強い相手には出会ったことがない。

のような例では［＿V］の消極的主語が「吾」をとっており、規則Aが優先している。また、否定文で［＿V］に置かれた目的語のばあい、「吾」と「我」の両方が許されることは3．1．で述べた。（7）～（9）では規則Aが優先し、（10）（11）では規則Bが優先している。

今後の課題は、このような場合に、どちらかの規則を優先させる、「助動詞による制約」のような条件を（もしもそれがあるなら）さらに見つけ出すことであると思われる。

【注】

本稿は日本言語学会第103回 大会（於南山大学；1991年10月26日）における口頭発表「上古中国語の代名詞『吾』『我』の区別にみる『二つの規則』」の内容に若干の修正を加えたものである。なお、文中『論語』の引用箇所の数字は、編次と条数をハーバード・燕京学社の『論語引得』に沿って記したものである。

口頭発表の際には、松本克己先生ならびに角田太作先生の、また発表後には留学先の北京大学中文系古代漢語研究室・郭錫良先生の、それぞれ貴重なご助言を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

1） このテーマに関しては、諸家の関心の対象は、春秋・戦国期の魯の国を中心とした地域の言語――すなわち『論語』『孟子』『春秋左氏伝』の言語 ― に集中している。本稿で「古典中国語」と呼ぶのも、具体的にはこの方言を指す。

2） たとえばvon der Gabelenz(1881)、馬建忠(1898)、胡適(1916)など。

3） 「カールグレンの仮説」は検討すべき二つの仮説を含む。第一の仮説は古典中国語の代名詞に格があったというもので、第二の仮説は、したがってそれ以前の段階において、中国語は名詞も格変化を起こす「屈折型」の言語だったというものである。本稿は第一の仮説を再検討するもので、第二の仮説については論じない。

4）　しかし王力は後に王力(1958)においてカールグレンの仮説を部分的には肯定した。

5）　たとえば周生亜(1980)は「言語の内的な規則の研究と、社会の発達や人民の歴史とを結合させていない」ことが過去の諸研究の弊害だとし、現実的対応として複数の要因を綜合することを提唱している。

6）　その他の問題とはすなわち、二人称代名詞「女（汝）／爾」及び三人称代名詞「其／之」、そして一人称でも「吾」「我」以外のもの（「予」「余」「朕」など）の問題、これら代名詞の所有格の問題、またこれらすべての『論語』以外の資料における現れ方を指す。これらの代名詞のペアは再構音こそ人により違うが、音形における対立が並行しているという考えはほぼ定説である。

7）　以下、代名詞「吾／我」の位置について、「動詞に先行する」ことを［＿Ｖ］、「動詞に後続する」ことを［Ｖ＿］とそれぞれ表す。

8）　「我」を選択することが、位置とは無関係に「目的語」という意味上の基準によるのなら、［＿Ｖ］の主語になる「我」はどうなるのか、という疑問が当然ながら生じる。本稿ではこの［＿Ｖ］の主語の「我」に、ここで言う「目的語」と共通する意味上の特徴があることを３．３．以下に主張する。

9）　このテーマに関して、ヨーロッパでの研究が主格・対格の格の問題として処理しがちなのに対して、日本での研究の多くが敬語法などの文体差としてとらえる傾向があるという事実は、分析に与える研究者の母語の影響という点で興味深い。

10）　「我」を非動格とすると、これが他動詞文の主語となることが問題視されるかもしれない。一般に動格は他動詞文主語と意志的な自動詞文主語、非動格は目的語と非意志的な自動詞文主語と理解されているのに、「我」は他動詞文主語の非意志的な部分をも取り込むことになるからである。しかしそもそもKlimov(1974)も言うように、このタイプの言語にとって自動詞／他動詞の区別は重要ではなく、動作に反映する意志性の方が重要なのだから、このような言語があっても不思議ではなく、むしろ通念よりもさらに典型的な動格言語であるといえよう。

11）　この「吾」への「助動詞」の関与についてはvon der Gabelentz(1881) によっても指摘されている。

12）　この表の中で、「我」のため［Ｖ＿］の主語という枠を設けたことは、従来の中国語学の枠をはずれるものである。しかし存在動詞「有」「無（毋）」の後ろの名詞句が存在主体であり、「意味上の主語」であることは明らかである。これを中国

語学で主語と呼ばないのは、現代語（古典語ではなく）の文法体系に規則ＡとＢの対立のようなものがなく、したがって形式上以外の主語の概念を必要としないからに過ぎない。

【参考文献】

von der Gabelentz, Georg (1881) Chinesische Grammatik. Leibzig.

胡 適(1916)〈吾我篇〉《胡適文存》所収

Karlgren, Bernhard(1949) The Chinese Language: An Essay on its Nature and History. N.Y.（『中国の言語－その特質と歴史について』江南書院、1958年）

(1920) 'Le Proto-Chinoi, langue flexionnelle.' Journal Asiatique.

（中訳〈原始中国語為変化語説〉《東方雑誌》26.5.p.77-89.）

Klimov, G.A. (1974) 'On the Character of Languages of Active Typology.' Linguistics. 131.p.11-25.

馬建忠(1898)《馬氏文通》

王 力(1936)〈中国文法学初探〉《清華学報》11-1.

(1958)《漢語史稿》（1980年新版・中華書局）

周生亜(1980)〈論古代漢語人称代詞繁複的原因〉《中国語文》80.2.p.127-139.

周法高(1952)〈評高本漢「原始中国語為変化語説」〉《中国語文論叢》（正中書局、1963年）所収

Division of Labor between First Person Pronominal Forms 'wu' and 'wo' in Classical Chinese

SUGITA Yasushi

Classical Chinese in Chunqiu period is said to have had so-called 'case system' i.e. the diferences in syntactic function between such forms as 'wu' and 'wo'. Bernhard Karlgren once argued that 'wu' is the nominative-genitive form of 1st. person pronoun, and 'wo' the accusative-dative form. But his opponents argued that there are many exeptions in which 'wo' stands for subject of the sentence. This paper concerns with these 'exeptions' and attempts to answer the question why 'wo' becomes both subject and object.

Here we find that pronoun 'wo' as subject and the one as object have a common feature in their usages in The Analect. 'Wo' as a subject of the sentence is almost always used in cases when the predicates express some stative phenomena. This shows that 'wo' behaves like 'inactive case' in languages of Active-inactive typology. Two exeptions in which 'wo' becomes subject of voluntary actions rest, but all of these actions are always done as reactions to some outer force, not as the action which the actor wanted himself to do. So, 'wo' stands for 'involuntary case', which codes passive attitude of the actor to the state or event which is described in predicate.

As is well known, 'wu' always precedes predicate verb of the sentence, even when it becomes object of the verb. So, 'Wu' obeys a rule of precedence, a rule which is perfectly obeyed by 'wu'; while 'wo' obeys a rule of voluntariness, a rule which is perfectly obeyed by 'wo'. Reverse combinations of pronouns and rules are not formed regidly. 'Wu' sometimes behave like voluntary subject, but sometimes not; 'wo' sometimes behave postverbally, but sometimes not. This is the reason why such rules have so-called 'exeptions'.

(原稿受理日　1993年8月27日)